

ヤングケアラー支援における関与のあり方

—— A 児との関わりから ——

高 君 衣

京都大学大学院 人間・環境学研究科 人間・環境学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 ヤングケアラーは家族を献身的にケアする過程において、自らのこころがわからなくなる傾向にある。本稿では、支援活動で出会った A 児との関わりを通じて、ヤングケアラーにはいかなる関わりが必要であるのか、エピソード記述法を用いて考察した。結果として、D. W. ウィニコット (1896-1971) の提唱する、主観的世界を育てる「抱っこ — holding —」の関わりと、現実世界の中で主観的世界を広げることができる「中間領域 — intermediate area —」での関わりが必要であることが明らかとなった。

そしてヤングケアラー支援には、子どもの主観的世界を支え育てる役割と、外的な現実世界として現れるケア状況を支える役割という 2 つが求められていることから、「中間領域」が必要であると結論づけられた。

キーワード：ヤングケアラー、エピソード記述、抱っこ、中間領域、質的研究

1. は じ め に

1993 年、ジョー・オルドリッジとソール・ベッカーが“*Children Who Care: Inside the World of Young Carers*”というタイトルの論文を発表し、ヤングケアラーの存在を世界に知らしめた。これは世界に大きなインパクトを与え、ここから世界的に調査研究や支援活動が進められ始める。

我が国もその影響を受けた一つである。調査研究においては、三富 (2000) や柴崎 (2005) などからイギリスの介護支援制度やヤングケアラーについて紹介されたことを皮切りに、2000 年以降から精力的に進められてきた (渋谷, 2017)。

現場での支援活動では、各地方自治体の意思によって手探りの状態で展開されてきた。例えば、ヤングケアラーの子どもが放課後に集い、支援スタッフとともに遊んだり宿題したり話したりするなどして自由に過ごせる「居場所事業」、月 1 回

の「野外活動」、当事者が話せる「場」の提供、物資配達事業など、その支援活動は多岐に渡る (こどもソーシャルワークセンター、ヤングケアラー協会、ふうせんの会など)。

これまで各地方自治体の意向によって展開されてきたヤングケアラー支援活動であったが、2024 年 6 月 12 日、ついに子ども・若者育成支援推進法の一部改正によりヤングケアラー支援が法制化された。子ども・若者育成支援推進法では、ヤングケアラーの定義について「家族の介護その他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められる子ども・若者」と明示されている (2025 年 3 月末現在)。

法制化への動きに伴い、調査研究はより一層注目を集めている。これまでの調査研究を概観してみると、ヤングケアラーに関わる職員や子ども達に向けた質問紙調査による実態調査、元ヤングケアラーであった人々へのインタビュー調査や当事者研究、世界各国における支援状況の比較検討や

これまでの研究動向を分析する調査研究など、多方面からアプローチされてきたことがわかる。しかし、ヤングケアラーが抱える困難に対して、実践を通じて具体的な支援のあり方を示す研究は見受けられない。

ヤングケアラーは身近な親や家族がケアを必要としているため家庭に必要なケアを受けられないことが多くあり、そうした影響のひとつに、自らが感じている本当の「こころがわからない」ことが実態としてある。「こころがわからない」とは自らの感受性が失われていることを意味する。子どもは大人に成熟する基礎を成す大切な時期であることから、この時期に感受性が失われることの影響は生涯に及ぶ可能性が高く、非常に深刻な問題である。しかし、これまでほとんど言及されてこなかった。そこで本稿では、こうした問題に実践を通じてアプローチすることを目的とした。

そして、ヤングケアラーが自らの思いを十分に言語化するには未熟な子どもであることを考慮すると、これまでの調査でヤングケアラーの現状を十分に捉えられているとは言い難い。というのも、言語化が難しい子どもに対して、言語を媒介とした調査が行われてきたからである。さらに、大人とは異なる世界に生きている子どもの現状を捉えるには子どもの世界に沿って捉えていく必要がある。

以上の点を踏まえ、本稿では、自らが本当に感じているこころがわからなくなる傾向にあるヤングケアラーの思いを捉えるためにはいかなる関わりが必要か、エピソード記述法を用いて考察した。そして、考察の結果を踏まえ、ヤングケアラー支援はいかなる役割を果たす必要があるのか、考察を試みた。

1.1 用語の定義

本研究を論じるにあたり、主題となる「ケア」、「ヤングケアラー」について定義する必要がある。まず、ケアについては各国や論者によって様々な解釈がなされている。「ケアの本質」を論じたメイヤロフ（1971/2001）によれば、ケアとは介護や世話といった具体的な援助行為だけでなく、他者の成長が自らの自己実現になることであり、他

者が第一義的になることを述べる。また、村上（2022）は「ケア」の英語の意味について「気づかう」や「慮る」などを含むとしていることから、本稿では、ケアを「家族である他者の欲求を第一義的に捉え、家族のために施している状態」と広義に定義する。そして、ヤングケアラーとは、こども家庭庁（2025年3月末現在）において「子ども・若者」を対象としていることから、「そうした状態にある子ども・若者」とする。

2. 問題の所在

ジョー・オルドリッジとソールベッカーにより、ヤングケアラーの子どもには「子どもであること」と「ケア負担」の二重負荷があると指摘され、日本でも多く言及されている（澁谷，2017，2021；河西，2020；淡路，2024など）。ヤングケアラーには、子どもにとって過度なケア負担がかかることのみならず、子どもとして在ることも担保されないという負荷がかかっている。

一方、ヤングケアラーが抱える問題には、二重負荷のみならず、養育者の役割が十分に果たされないことによる負荷もある。田野中（2019）は、精神疾患の親をもつことによる子どもへの影響について、成人10名へのインタビューから明らかにしている。学童期から思春期にかけては「【世話をされない苦しい生活】がある」と指摘しており、世話をされないことによる苦しみも大きな負荷となっている。

2.1 「普通の生活」が担保されないことによる問題

田野中が得たインタビュー結果から、「世話をされないことによる苦しみ」に関する箇所を抜粋する。以下の抜粋箇所では、〔 〕は田野中による研究結果の分類を、“ ” は研究参加者の語りを斜字で、原文のまま記載する。[…] は筆者による省略である。

「生活面では、健全な親も十分に子どもの世話ができない場合、〔大人から生活の世話を十分にされない苦しさ〕から、小学校低学年の子どもは、給食が主な食事になり、栄養不足で倒れたり、

“心がずさんでいた”。また、家の中は物で散乱していた。[…] さらに、〔普通の生活を知らない恥ずかしさ〕では、生活習慣として挨拶や入浴、着替えを知らず、就学以降に友達に匂いや汚れを指摘され、恥ずかしい思いをした子どももいた。[…] 高校生になると家庭での役割が増え、〔家の管理や祖父母の介護の過大な負担〕を感じていた。“普通だったら親から、家事のやり方を教え（られ）たり、親のやることを見たりすると思うんですけど、うちではできなかったの、家事や生活全般、人と人とのやり取り、これで良かったのかとか、食事の前に、「いただきます」と言うとか、そういう細かいところまで教えてくれる人が必要だったんじゃないかな”」「普通の生活が分からないため家事や日常生活の中で自信がもてなかった。」「心を許せる人や場所がなかったことから人との接し方や距離感の分からなさ、場の雰囲気をみて動くことの苦手さを感じていた。また、人に合わせて生きてきたため自分の意見をだすことの難しさもあった。他の人と比べて上手く自己表現したり、自分の考えを整理して伝えられないことを自覚し、大学時代のレポートが書けなかったり、就職の面接で上手く対応できないこともあった。さらに、このような生きづらさに成人してから一人で向き合わないといけないう辛さがあった（田野中, 2019, p. 26, 28).」

普通の生活がわからないことによって、子どもは多くの困難を抱える。子どもが健康に成長するためには養育者の存在が不可欠であり、養育者から基本的なケアを受けることが必要である。しかし、ヤングケアラーが育つ家庭においては養育者自身がケアを必要とする場合が多く、子どもは困難を抱えやすい。養育者から基本的なケアを受けて生活できること、それが「普通の生活」である。

そうした背景は、生活面だけでなくこころの育ちにも大きく影響する。その影響の一つに、自らが本当に感じている「こころがわからない」ことが実態として見受けられる。親や家族がケアを必要としている中で、子どもは献身的に関わろうとし、その過程に自らの気持ちよりも家族を優先し、いつしか自らが本当に感じている「こころがわからない」ことに至ってしまう。こうした実態は、

質問紙調査でも如実に現れている。

2.2 質問紙調査から見える課題

厚生労働省が2020年、2021年に行なった実態調査で、中学2年生、全日制高校と定時制高校の2年生、通信制高校の子どもを対象に質問紙調査を実施している。中でも興味深いのが、「世話をしているために、やりたいけれどできていないことがあるか」という質問に対し、中学2年生、全日制高校の2年生、定時制高校の2年生においては、半数以上が「特にない」と回答している。「過度なケア負担」を担う子どもであれば「やりたいこと」はできていないはずだが、半数以上がこのように回答した背景を見逃してはならない。

こうした回答の背景には多様な心的背景が予想される。「そもそもやりたいことが“わからない”」子ども、「やりたいことがあるが答えることに“罪悪感を抱えている”」子ども、「やりたいことが“見つからない”」子ども、真に「特にない」とする子どもなど、飯島（2023）は「特にない」と答えざるを得なかった背景には子ども達の葛藤があることを指摘しており、子どもの心的背景を明らかにする調査研究が求められている。

2.3 「わからない」苦しさ

ヤングケアラー経験者の語りからも、自らが本当に感じている「こころがわからない」という実態が見受けられる。

中村は著書で「ヤングケアラーの一つの特徴は、自分の願望や欲望よりも先に病気の家族の願望を優先してしまい、しまいに自分が何を求めているのかわからなくなるということである。[…] 相手が何を求めているかを先に読み取り、先回りしてそれをまるで自分が願っているのと感じている（中村, 2023, p. 35).」と述べる。また、元ヤングケアラーである高岡は「子どもは親と自分の境目があやふやです。幼い時代から親のケアをしていると、大人になってからのケアの場合よりも、自分の心身を捧げてしまう傾向があるように感じます（高岡, 2023, p. 20).」と述べる。

子どもは幼い頃から家族に献身的に関わる中で、自らの気持ちよりも家族の気持ちを優先する傾向

にあり、いつしか自らの感受性を失ってしまうのである。筆者がよく知る人もまた、「わからない」苦しみを経験してきた。以下、筆者がよく知る人のエピソードについてである。臨場感をもって伝えるため、筆者がよく知る人を〈私〉と記述し、その他の登場人物については、プライバシー保護のため大意を損なわない程度に改変し記述する。

〈私〉は両親が共働きの家庭で育った。仕事で忙しかった親に代わって、隣の家に住む7歳離れたお姉さんが家族のように面倒をみてくれていた。お姉さんの両親もまた、仕事で忙しい人だった。家にひとりでいることが多かったお姉さんは、家の掃除や下の子の面倒など、幼いながらにこなすヤングケアラーだった。〈私〉はそんなお姉さんに面倒を見てもらいながら育った。〈私〉が保育園に通う頃、お風呂に入れてくれたり寝かしつけたりしてくれるのは、いつもお姉さんだった。絵や勉強が得意で、優しくて大好きなお姉さんだったことを記憶している。しかし、お姉さんが高校生になる頃には次第にイライラするようになった。〈私〉が小学生になり、学校で嫌だった出来事をお姉さんに話すと「それはあんたが悪いやろ!!」と怒られるようになった。〈私〉は、次第に感情のコントロールができなくなっていくお姉さんを気遣うようになり、学校で起きる嫌なことも「わからない」ようになっていった。〈私〉はヤングケアラーを気遣うヤングケアラーだったのかもしれない。

〈私〉は大人になり、多くの経験に触れ、自らのこころが感じられるようになった今、そうした「わからない」苦しみも、自らの「こころ」もわかるようになった。「こころがわからない」とは、自らの中に苦しみが存在しないのではなく、「わからない」と表現される「耐え難い苦しみ」なのである。「わからない」とは、どんな苦しみと言えば良いだろうか。ひどく悲しみ、何かに絶望し、感じることは「無駄なもの」といった感じで、ただ「虚しさ」だけが残る感覚、と言えば伝わるだろうか。言葉が湧き上がってくることはなく、ただ「わからない」といった言葉しか浮かばない。生きているのか、生きていないのか、よくわからない世界が続き、〈私〉がそこに存在していない

ような感じもする。そうした「わからない」感覚は、〈私〉を「虚しい」ものにしていたのだった。

中学生になる頃からほとんど会っていなかったお姉さんと再会したのは、〈私〉が大人になってからだった。久しぶりに話すと、お姉さんもまた、「わからない」ことに苦しんでいたことがわかった。

3. 目 的

以上の問題意識から、本稿では目的を二点設定した。

第一に、他者の気持ちを優先する傾向にある子どもが自らの「こころがわかる」にはいかなる関わりが必要か、第二に、そうした必要な関わりを明らかにした上で、ヤングケアラー支援はいかなる役割を果たす必要があるのか、導くことである。

4. 研 究 方 法

4.1 方法に関する留意点

以上の目的を達成するために、三点、留意しておく必要がある。

第一に、知覚していることを言語化する力が、成人に比べて未熟な子どもの思いを捉えるには、言語以外に、情動や表情、仕草、その場の雰囲気や空気感なども踏まえる必要がある。しかし、これまで行われてきた調査では成人に向けた調査と同様の調査方法が取られ、子どもの特性が考慮されていない（伊藤他, 2023; 宮川他, 2021 など）。名城（2023）は、一般社団法人日本ケアラー連盟が作成したイラストを用いて調査しているが、言語やイラストを介した質問紙調査では、言葉にならない子どもの思いを捉えきれない。よって、子どもの世界に寄り添い言語以外の側面も踏まえ捉えていく必要があることから、調査方法として〈エピソード記述法〉を採用した。

第二に、本稿では小学生以下の子どもを対象に調査研究を進めた。「こころがわかる」には、成人へと人格形成がなされる前にアプローチしていくことが重要である。というのも、子どもは成人へと人格形成していく基礎を成す時期であり、そ

の影響は生涯に渡る可能性が高いからである。子どもの頃にアプローチする重要性が高いことから、調査対象を小学生以下の子どもにした。

第三に、ヤングケアラーの子どもが、自らの本当の「こころがわかる」ためにアプローチできるのは社会である。子どもが困難を抱える責任を養育者に帰結させることはできない。なぜなら、養育者も子どもにケアできない背景があり、筆者のよく知るひとを面倒見ていたお姉さんもまた、ケアを必要とする存在であった。よって、ケアを必要としている家族に子どもへのケア責任を帰結させることは得策ではない。そこで本稿では、社会的支援から関与のあり方を明らかにすることを試みた。

4.2 エピソード記述法とは

ここで、エピソード記述法について説明しておく。エピソード記述法とは、関与観察とエピソード記述を合わせた手法である。関与観察とは、精神科医であった H. S. サリヴァン (1953/2022) の「関与しながらの観察 —— participating observation ——」を鯨岡が一つにまとめて表現した言葉である (鯨岡, 2005, p. 63)。

関与観察で重要なことは、観察者が自らの身を隠して客観的に観察することではなく、自らの人格を通して観察していくことである。「関与しながらの観察」を提唱したサリヴァン (1954/1986) は、「科学的検討に適合してデータとなりうるものは過程および過程の変化である。これらが生起するところは被験者の個人の中ではない。観察者の内部でもない。観察者と被験者とのあいだに創造される場 (状況, situation) においてである。」と述べる (サリヴァン/中井他訳, 1954/1986, p. 19)。つまり、観察者と対象とのあいだで生起された「場」において、研究者であり観察者である「私」は、無色透明な観察者としてその場に立ち合うのではなく、「私」の五感すべてを使うことを通してその「場」を捉えていこうとする手法である。

次に、エピソード記述とは、従来の客観主義的な発達研究への違和感から鯨岡峻によって考案された、体験の意味を掘り下げる質的研究の一つで

ある (山本, 2023)。観察者である「私」と対象となる「子ども達」との「あいだ」で生じた「場」について、観察者自身も観察される対象としてメタ的に捉え描いていく。そうして捉えられた「場」は、観察者である「私」の問題意識を背景に図として生起してくることから、背景となる「私」の問題意識や興味関心についても提示する。そうすることで、そこで生起した「場」の意味を掘り下げることを目指す。

エピソード記述法では、従来の客観主義的指標で取りこぼされてきた「生身の人間の生」を取り上げを試みる。鯨岡は「客観主義的な指標では取り上げられないからという理由で、あるいは数量化できないからという理由で、再現可能ではないからと見捨てられてきたことが、実は人となりの『あいだ』で生じている大事なことであり、それをはずしては人の生の『あるがまま』に迫れないことがみえてきます (鯨岡, 2005, p. 22).」としており、エピソード記述法はよりリアルな子どもの現状を取り上げていく方法として適していると言えよう。

4.3 研究の進め方

筆者は、支援活動を通してボランティアスタッフとしてヤングケアラーの子ども達と関わり、その過程で生起した日常的なエピソードを収集した。活動終了後、筆者や支援員と子ども達との関わりが観察される場面について描き出し、日常で見受けられる子ども達の反応や言葉を基に調査研究を進めた。

支援活動は、養育に支援が必要な家庭への訪問活動 (月 1 回) とレクリエーション活動 (月 1 回) の 2 つである。研究期間は、2024 年 4 月～2025 年 3 月である。研究協力者は、支援対象の小学生以下のヤングケアラーである子どもとし、そのうち、子どもと親の双方から調査研究への協力同意が得られた者を対象とした。また、支援事業所の担当支援員と責任者の許可も得て実施した。

エピソードは、筆者の問題意識をもとに印象に残ったエピソードを記述した。また、エピソードの紹介部分では、筆者自身は現場に巻き込まれながら観察していく者として、鉤括弧のない 私

と記述した。背景と考察の部分では、筆者を「私」と記述した。

4.4 倫理的配慮

本調査は、支援事業所の責任者と担当支援員の許可を得た上でを行い、研究協力については、十分な信頼関係が構築できた子どもに対して依頼した。子どもに対して口頭で丁寧に説明するとともに、年齢的に研究参加への判断が十分にできない可能性が考えられるため、保護者である親を「代諾者」とし、代諾者である親の同意書へのサインをもって研究参加の同意を得たこととした。なお、本研究は、人間・環境学研究科の倫理審査において承認された上で実施している（申請番号 25-H-13）。調査を実施する際は、現場スタッフと支援員に相談しながら、協力者の安全や権利の確保・保護などに十分注意を払って実施した。

5. 事 例

5.1 人物紹介

A 児は、母親の M さん、弟の B 児の 3 人家族である。猫 4 匹と共に、生活保護を受給しながら生活している。家は 2 階建ての木造で、ドアから隙間風が入ったり、壁が錆びついていることなどから、古びている印象を受ける。床やテーブルの汚れが目立つこともある。ヘルパーが週 1 回入っているものの、掃除やごはんの用意、洗濯などはほとんど A 児が担っている。A 児と B 児が 2 年前に隣人とトラブルになってから、筆者が活動した事業所の支援対象の地域へ引っ越してきた。それ以来、月 1 回の訪問活動を行なっている。

以下、家族構成員と支援員についての説明である。

A 児（以下、A ちゃん）：小学 5 年生、長女。スラッとした背格好で、友達とおしゃべりをするのが好きな女の子である。家で勉強をしたり読書をしたりするよりも友達と遊びに出かける姿をよく見かけるが、宿題はきちんとやろうとする。自ら部屋の掃除をしたり、B 児がだらしなときは怒ることがあり、しっかりしている印象がある。身の回りにはサンリオの「シナモロール」グッズが

多く置いてあり、子どもらしくて可愛い姿が見られる。

A 児の母（以下、M さん）：30 代前半、女性。支援スタッフとは、明るく素直にコミュニケーションを取っている印象を受ける。人付き合いは「うまくできない」と話し、現在の交友関係は学生時代の友人 1 人と姉家族との付き合いのみである。中学生の頃に「うつ病」と診断された経緯があり、現在でも「しんどくなって動けない」などの症状がたまにある。気分のムラも大きい。現在、精神科の診療は受けていない。過去にアルコール依存によってトラブルになり、警察に勾留された経緯がある。その間、子ども達は児童養護施設で生活していた。それ以降、彼氏がいたこともあったが「彼氏いない方が楽かな」と、現在は友人や姉家族とたまに交流しながら生活している。現在、断酒のために月 1 回病院へ通っている。

B 児（以下、B くん）：小学 3 年生、A ちゃんの弟。友達と遊ぶ時は全力で走ったり笑ったりする姿が印象的で、背格好は小さく、やんちゃな印象を受ける。B くんは発達に特性があり、友達と仲良くしようとして叩いたり、靴下を左右色違いで履くなど、生活行動に見守りが必要な側面がある。今年から支援学級へと移っているが、M さんの希望により診断は受けていない。B くんは、「好きなこと」は精一杯できるのだが、身の回りのことはままならず、家事は手伝えない状況にある。

支援員 C さん（以下、C さん）：40 代、女性。A ちゃんの家庭訪問の担当者である。「私」が支援活動に同行する半年ほど前から訪問している。小学校高学年の息子と成人した息子を持つ母親である。

支援員 T さん（以下、T さん）：50 代、女性。支援事業所の責任者である。高校生の息子と大学生の娘を育てる母親である。

5.2 エピソード 1 — 自己紹介—

〈背景〉

2024 年 7 月 X 日

この日は、小学 1 年生～中学 3 年生の子ども達が、定時制高校の学生達とカレー作りを体験する日である。「いつもの集いの場」に子ども達が少

しずつ集まり、全員で12人ほど集まった。友達と話している子もいれば、テーブルの下に隠れて遊ぶ子もいる。Aちゃんは猫の絵をひとりで書きながら待っていた。「私」は全体を見守るようにそばで立っていた。

みんなが揃ったところで、Tさんが「じゃあ、みんな今から自己紹介します。名前と、学年と、最後になんか一言言いたいことあったら言ってくださいね」とゆっくりと大きな声で話すと、みんな輪になるように動き出し、端にいた男の子から自己紹介が始まった。拍手で次の順番に移る。自己紹介をしているときは「シーン」とした空気が流れるが、たまに笑いが起こる場面もあり、終始和やかな空気が流れる。

子ども達が集まる場で、AちゃんはいつもCさんが隣に来ようお願いしていた。この日もCさんを隣にして自己紹介に参加していた。今回のエピソードは、Aちゃんの順番が来た時のエピソードである。

〈エピソード〉

AちゃんはCさんと手を繋ぎ、みんなと輪になり立っている。Aちゃんの順番が来た。しかし、Aちゃんは中々言葉が出ず、しばらく無言の時間が続く。その場が居づらくなったのか、AちゃんはCさんに抱きつく。「大丈夫、大丈夫」と、肩や腕を優しく叩きながらなだめるように声をかけるCさん。周りはじっとAちゃんのことばを待つだけで、Aちゃんをからかったりふざけたりする様子は見られない。無言になるAちゃんが心配になった私も、じっとそばで見守る。「シーン」とした空気が流れる。しばらくしてAちゃんは再びみんなの方を振り返るが、やはり言葉が出ない。心配したCさんが「私が代わりに言おうか？ Aちゃんですって、言ってみる？ それか、このかわいいの（さっきお絵描きしていたもの）見せる？」と声をかけてみるが、Aちゃんは「いやや」「ううん、私が言う」と駄々をこねるように伝える。沈黙の時間が続いてしまうため、今度はTさんから「じゃあ、最後にしようか？」とA

ちゃんに話しかけるが「ううん、言う」と話し、またしばらく沈黙の時間が続く。するとAちゃんは「うーん、やっぱり自己紹介を書いて見せるわ」と言い、手に持っていた絵に自己紹介を書き込みに、その場を離れる。他の子ども達が自己紹介を続ける中、私はAちゃんが心配になったため近づき声をかける。私がAちゃんと会うのは今回で3回目であるため、「前、おうちで会ったの覚えてるかな？」と声をかけ、Aちゃんの様子を伺う。Aちゃんは警戒するようにこちらを見るだけで、無言で首を振る。猫の絵を書いていたので、「かわいいね、このネコちゃん」と声をかけると「これ、家のネコ」と、硬い表情で答える。Aちゃんは黙々と自己紹介を書いていく。書き終わると、Aちゃんは私のことを気にも留めない様子で、それを持ってCさんの方へと向かう。戻ってきたAちゃんの後ろにCさんが立ち、「Aちゃんです、よろしくお願いします、やな」とCさんが覗き込みながら声をかける。Aちゃんは表情を変えず、少し俯き加減で、無言のまま書いたものを見せる。みんながAちゃんの書いたものに集中する。私は「みんなが無言になってしまったら、Aちゃんは大丈夫だろうか」と心配していたが、予想に反して「へー、猫飼ってるんや」「誕生日もうすぐだね！」「ほんまやー！ おめでとうやなあ」など多くの言葉が出てきて、その場は賑やかになった。Aちゃんはホッとしたのか、「仲良くしてください」と挨拶することができ、その場の自己紹介を終えることができた。

〈考察〉

「私」は、Aちゃんが普段から学校で友達と楽しく遊ぶことを知っていたため、この日も心配することなくそばに立っていた。しかし、Aちゃんは自己紹介の場面になると中々言葉が出ず、沈黙の時間が続いていた。Aちゃんにとって苦しい状況だっただろう。しかし最後には、いつも隣にいるCさんを通して自己紹介でき、その場を乗り切ることができた。Aちゃんにとって苦しい状況

を乗り切った経験は、Aちゃんに安堵感を与えるだけでなく、今後のAちゃんにとっても大切な経験となったであろう。Aちゃんにとって、この経験は意義深く、大切な時間であったと言えるだろう。

では、Aちゃんがこの局面を乗り切るために必要だったCさんは、Aちゃんにとってどんな存在であったのだろうか。また、言葉をかけても表情を変えず逃げるように去ってしまったAちゃんにとって、「私」はどんな存在であったのだろうか。

—AちゃんにとってのCさん—

Cさんは、Aちゃんが「苦しい思い」をしていることを「抱きつく」様子から感じ、言葉をかけ、落ち着かせるように、優しく叩いたりしながらなだめる。苦しい状況にいる「Aちゃんの思い」を、Cさんは「感じる」ことを通して「わかる」領域へと誘う。「わかる」とは、自己と対象を同一視し共鳴することである。つまりCさんがAちゃんの思いを「わかる」ことによって、AちゃんもCさんが「わかってくれている」ことを「わかる」ことができ、互いに気持ちが共鳴されているのである。そうしたCさんの存在によって、Aちゃんは自らの気持ちを見失うことなく、成し遂げようとする苦しい「場」に対峙することができたのである。

—Aちゃんにとっての「私」—

一方、Aちゃんと会うのが3回目になる「私」は、苦しい思いをしているAちゃんに声をかけてみるものの、「私」の問いかけには表情を変えず、すぐにその場を去ってしまった。この時の「私」は、Aちゃんにとって、気持ちを「わかってくれる」存在として位置せず、ただ形式的に質疑応答を繰り返すだけであった。

Cさんと「私」の違いは関係性にあり、CさんとAちゃんのあいだには、Aちゃんの支えとなる大切な関係性が築かれていることに気づかされたエピソードであった。しかし、Aちゃんと関わっていく中で「私」との関係性も変化していく。では次に、関係性の変化が感じられたエピソードについて紹介する。

5.3 エピソード2

—「いつの間にか2人になってる～」—

〈背景〉

2024年8月P日

Aちゃんとは訪問の度に顔を合わすものの、あまり話すことなく帰る日が続いていた。「私」からAちゃんに話しかけることがあっても、Aちゃんから話しかけてくることはなかった。この日も、CさんとMさんと話して帰ろうとしていたときのエピソードである。

〈エピソード〉

Cさんと私はMさんと向かい合わせて座り、いつものように「そろそろかな～」と言いながら、子ども達が帰ってくるのを待っていた。そこへAちゃんが先に帰ってきた。居間に入ってきて私を見るなり、「ああ、前のひとね」という感じで、一瞬目が合うものの、ランドセルを降ろすとそのままMさんの横に座り、携帯ゲームを始めた。その後すぐにBくんが帰ってきた。居間に入ってくるなり「こんにちは」と言い、Cさんと私に向けてペコっとお辞儀をする。ランドセルをおろすなり、そばにいた猫を抱きかかえ、その抱きかかえた猫を私に戯れさせようとして背中に乗せてきた。急な計らいに私は驚き、「え～！」と笑いながら、背中に乗せた猫をかかえていると、Bくんは嬉しそうにケタケタ笑う。みんなも一緒になって笑いが起こる。見兼ねたMさんが「Bくん、やめ～！」と注意すると、Bくんは大人しく猫を下ろした。

少し賑やかな雰囲気になったところで、私はAちゃんに「覚えてる？」と聞いてみる。「前のカレーのときおった」と表情を変えず、ただ返事をするAちゃん。「覚えてくれてたんな～ありがとう」と私が返すが、Aちゃんからは特に返事する様子もなく、Mさんの隣で携帯を触る。しばらくすると、AちゃんはMさんに学校の話始めた。私は、AちゃんとMさんの話を共有するように、そばで座っていた。するとAちゃんが急に「いつの間にか2人になってる～」と、少し照れくさそうに、顔が綻んだ様子で、Cさん

と私に向かって話したのである。これまでCさんしか訪問に来なかったのに、いつの間にか私が増えていることに気づいたかのように、「いつの間にか2人になってる～」と話したのである。それがおかしいとでも言うように、私たちは「ほんまやな～2人になってるなあ～」と、みんなで一緒になって笑う。その場は終始、みんなで話が盛り上がり、笑いを共有していた時間であった。

〈考察〉

これまでのAちゃんは、「私」が話しかけても硬い表情でただ返事をするのみであったが、「いつの間にか2人になってる～」と話す言葉には、Aちゃんから「私」に興味関心が向けられたことがうかがえる。実際、この日を境に、Aちゃんからいろんな話をしてくれるようになり、いろんな表情を見せてくれるようになった。

Aちゃんから興味関心が向けられたことは、Aちゃんとの関わりを深めていく上で非常に大切なきっかけとなった。では、そうした関係性の中で、ヤングケアラーであるAちゃんにとって必要な関わりとは何だろうか。次のエピソードで検討する。

5.4 エピソード3

—「これはAにぴったりの言葉やな～」—

〈背景〉

2024年12月Q日

自分の気持ちをよく表現してくれるようになったAちゃんは、ある日には、大事にしている人形や幼い頃から使っているタオルを見せてくれ、いろんなエピソードを話してくれるようになった。そんな子どもらしいAちゃんは、ヤングケアラーとして家事をよくこなし、責任感の強い女の子だった。「ママが大変やから」とよく話し、「私がしなきゃいけない」という責任感を思わせることが多かった。Aちゃんに「家事とか、しんどくない？」と聞いても「いつものことやから」、「ママに言ってもなんにもできひんもん」などと返事をし、Aちゃんから「嫌だ」と聞くことはなかった。「私」は、Aちゃんが友達と遊んだり休んだり好きなことをしたり、自由な時間があるのか心

配に思っていた。

この日の訪問では、クリスマスが近いこともあり、事業所に支給された絵本をサンタさんからのプレゼントとして渡すことになっていた。CさんはAちゃんに似合う絵本として「きみのそばにいるよ」を選び用意していた。絵本には綺麗な夜空と小さなどうぶつ達が描かれ、話しかけるような文章が散りばめられている。その絵本をAちゃんに渡したときのエピソードである。

〈エピソード〉

CさんからAちゃんに絵本を渡すと、Aちゃんは袋から取り出して両手で絵本を持ち、「きみのそばにいるよ」と声に出す。文章を読むのはあまり好きじゃないAちゃんは、パラパラと絵本をめくり、一番後ろにあった「月の満ち欠け」の絵が書いてあるところを開く。すると、少し興奮気味に「わあ～これ好き～!」と言い、「みてみて!」とでもいうように、開いたページをみんなに見せる。Cさんと私は「わ～、ほんまやな～!」といった様子で、その喜びに同調する。その場はとても賑やかな時間が流れていた。

Aちゃんは絵が気に入ったのか、もう一度絵本に戻り、初めから1ページずつ開いて声に出して読み始めた。私はこっそりとAちゃんの隣に行き、読むページに合わせて「うんうん」「そうなんだね～」「きみのいいところが好きって言ってるね。Aちゃんのいいところはどこかな～」など、時折相槌をうちながら聞いてみる。それまでBさんとMさんが話していたり、MさんとCさんが話していたりと、少し騒がしかった場が、いつの間にかAちゃんの絵本の読み聞かせのように静まり返り、みんなは聞き入っていた。静まり返った様子に「周りの期待に応えようとして、無理をして読もうとしていないだろうか」と心配になった私は、ページをめくる合間に「読むのしんどくない?」と、こっそりAちゃんに聞いてみる。しかしAちゃんは読むペースを変えずに「うん」と答え、すぐに次のページを読み始める。その様子はと

でも熱中しているようだった。

最後まで読み終わると、みんながAちゃんに拍手をする。私が「一番好きなところ、どこやった？」と聞くと「うーん、わからんわ。でも、この絵が好き！ これかわいい！ みて～」と、絵を指さしてみんなに見せながら答える。それに同調し、みんなも「ほんまやな～」「ハイタッチしてるなあ」など、それぞれが声をかける。私は「絵本の内容よりも、絵の方が好きなんだな」と感じ、かわいい絵本をもらったことに喜んでるように感じていた。

すると、またパラパラと絵本をめくりだし、あるページで指が止まる。「これはAにぴったりの言葉やな～」と穏やかな口調で言う。そのページを見てもう一度読み出すAちゃん。

心がチクチクするときはね、
「そこまでがんばらなくていいよ」
っていう サインなの。
ひとりで かかえて、
がんばっていたんだね。
たくさん、たくさん、
がんばっていたんだね。
(きみのそばにいるよ, 2023, P9)

その後も、「あ、これも好き。Aのこと、言ってるみたい」とハッとしたように話し、気に入ったページを読んでくれる。ぽーっと、無心にパラパラと絵本をめくり、気に入ったページを読む姿は、まるで絵本がAちゃんの気持ちをよくわかってくれるとでもいうかのようで、Aちゃんは安心し、感動しているようだった。

〈考察〉

Cさんと「私」からAちゃんへ絵本を渡した時、絵に夢中になっていたAちゃんの様子からは、絵本に書いてある文章や内容には関心がないように見えていた。しかし、絵本のかかわりから次第に内容へと関心を持ちはじめたのか、1ペー

ジずつ読んでいくAちゃん。読み終わった後に「一番好きなところ、どこやった？」と聞いてみたが、やはり絵の方に関心が向き、絵本の内容にあまり関心がないように思えた。しかし、Aちゃんは再び本をめくり、あるページで手が止まり「これはAにぴったりの言葉やな～」と話す。これまで家事や弟の面倒について「しんどくない？」と聞いても「いつものことやから」と答えていたAちゃんが、「これはAにぴったりの言葉やな～」と話したことに、私は驚いたと同時に安心する気持ちを感じた。Aちゃんのこの言葉には、「しんどい」と感じていた自らの思いにAちゃん自身が気づき、絵本を媒介として他者と共有することができたことに大きな意味がある。このエピソードはより深い段階でAちゃんを「わかる」ことに繋がった瞬間であり、ヤングケアラーであるAちゃんを支えるために、重要であり必要な意義深いエピソードであった。

6. 総合考察

総合考察では、3つのエピソードから見えるAちゃんとの関わりについて考察し、そこからヤングケアラー支援のあり方について検討する。

まず、3つのエピソードに共通していることは、Aちゃんが自らの思いを表出するには関係性が重要だということである。エピソード1の場面で、「私」が問いかけた時のAちゃんと「私」は、Aちゃんの気持ちが共有されていないことがうかがわれ、一方、AちゃんとCさんは、気持ちが共有されていたことがうかがわれる。Cさんと「私」の違いは関係性にあった。それはいかなる関係性によって可能になるだろうか。

6.1 「抱っこ — holding —」の関係性

エピソード1は、自己紹介の場面で中々言葉を出せなかったAちゃんがCさんの関わりによって乗り切ることができた場面を描いた。6.1では、子どもの健康的な精神の成長を母子関係のあり方から明らかにした、D. W. Winnicott（以下、ウィニコット）の概念を用いて考察する。

ウィニコットは、子どもの精神が健康に成長す

るためには holding の概念が重要であると述べる。holding には、(1) 制御、維持、固定 (2) 所持、包容、収容 (3) 耐久、持続、忍耐の、3 つ全ての意味が含まれているとされる (北山, 1989, p. 359)。日本語では適切な表現がないため、本稿では「抱っこ」と表現する¹⁾。ウィニコットが述べる抱っことは、単に身体的に抱きかかえるだけではなく、身体的、精神的、環境的に抱きかかえることを意味している。例えば、泣いている赤ちゃんが母親に抱きかかえられる様子は、身体的に抱きかかえられつつ「泣いている私」も抱きかかえられている。このことは、泣いていることを理解し共有してくれる母親によって精神的にも抱きかかえられていることを意味する。こうしたあり方は、赤ちゃんが赤ちゃんとして存在する機会を与え、「自分として在る」ことが経験できるようになる (ウィニコット／成田, 根本 訳, 1966/1993, p. 19)。身体的、精神的、環境的に抱っこされることによって「自分として在る」ことが可能になり、自らの身体と精神が一体となっていくのである。このような抱っこの関わりは、幼児のみならず精神的に未熟な子どもや精神疾患を持つ成人にも必要な関わりとされている。

エピソード 1 の場面で、A ちゃんが C さんに抱きついたとき、A ちゃんが「苦しい思い」をしていることを C さんはわかり、優しく肩を叩き、なだめるように声をかけ、そしてその場でじっと沈黙を共有することを通して、身体的にも、精神的にも、環境的にも、C さんは A ちゃんを抱っこしていた。A ちゃんはその場で「苦しい思い」をしていたが、C さんによって抱っこされたことにより、その「苦しい思い」を A ちゃん自らの思いとして受け止め、その場で「A ちゃんとして在る」ことができ、そして、自己紹介を自らのやり方で乗り切ることができたのである。

一方、A ちゃんと抱っこの関係性が築けていない「私」は A ちゃんの体験世界を共有できていなかった。つまり、「私」は A ちゃんの外の世界に位置していたのである。

6.2 抱っこの関係性の広がり

A ちゃんにとって外の世界に位置していた

「私」であったが、C さんとのあいだで育まれた抱っこの関係性によって「私」との関係性にも変化が訪れる。エピソード 2 は、これまで A ちゃんの外の世界にいた「私」が A ちゃんの世界に入る瞬間のエピソードである。

A ちゃんが恥ずかしがりながら「いつの間にか 2 人になってる～」と、「私」や C さんに向けて話してくれたこの場面は、A ちゃん自ら、A ちゃんの感じている世界を共有しようとした瞬間である。「私」が C さんと共に訪問に来るようになったことは、A ちゃんにとって、「新しい」ことであり、少し「おかしな」感じがすることだったのだろう。そうした A ちゃんの感じている世界を「私」や C さんに向けてくれたことは、A ちゃんの外の世界にいた「私」を、A ちゃんの世界に入れようとしてくれた瞬間であった。エピソード 2 は、抱っこの関わりを通して C さんとの間で育まれた世界が、さらに広がりを見せた場面であった。

6.3 思いの表出から共有へ

エピソード 3 は絵本を通して自らの思いを表出できた A ちゃんの姿を描いた。これまでの A ちゃんは、ケアのしんどさについて聞いてみても「いつものことやから」、「ママに言ってもなんにもできひんもん」と話していたが、絵本を通すことによって「しんどい」思いが表出され、他者である C さんや「私」と共有できたのである。では、A ちゃんにとって絵本はどのような存在であり、また、そこにはどんな世界が広がっていたのだろうか。

ウィニコットによれば、生後初期の赤ちゃんが体験する世界は自他未分の世界であるという。赤ちゃんにとって「個体 (自分)」と「環境 (他者)」は一つの単位として捉えられているため、「環境 (他者)」は自らの「主観的世界」の中で空想したり作り出すものとして現れる。しかし実際は、「環境 (他者)」は空想世界のものではなく、客観的に証明可能な現実世界が広がっている。そうした赤ちゃんにとっての外の世界 (外的な現実世界) を成長過程で受け入れていく必要があるのだが、そこでは大きな衝撃を受けるとされる。そこで赤ちゃんや子どもは、自らの主観的世界と現実世界

の2つの世界をつなぐ体験世界を通して現実世界を引き受けていけるようになる。そこで体験される空間や体験過程を、ウィニコットは「中間領域 — intermediate area —」としている²⁾ (ウィニコット／北山監訳, 1952/1990, p. 99)。子どもが健康に成長するには、こうした中間領域の体験過程が必要であるとされる一方で、この体験過程は成人にも必要であるとしている。子どもが成長する過程で「遊び」や「おもちゃ」、「人形」などを通して中間領域を体験していくのに対し、成人には「芸術」や「宗教」などが含まれるとされており、中間領域は自らの感受性を失うことなく現実世界を引き受けていく上で非常に重要な空間、体験過程であると言える (ウィニコット／北山監訳, 1951/1990, p. 105-107)。(下図参照)

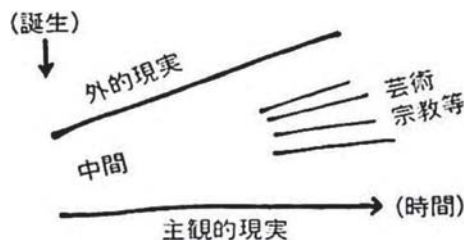


図1 一時的狂気の中間領域

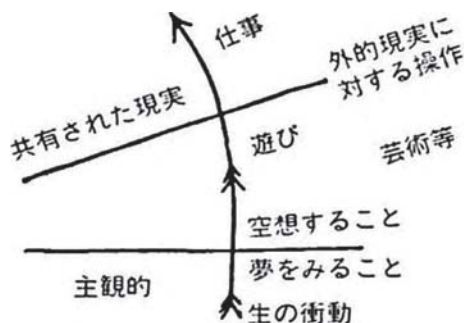


図2 図1の推敲

(ウィニコット／北山監訳, 1952/1990, p. 99)

Aちゃんにとって、Cさんと「私」からもらった絵本は、まさにAちゃんの空想世界を広げるものとして立ち現れたのであり、その空想世界に入ることによって、Aちゃんは自らの「しんどい」思いが表出されたのである。つまり、絵本はAちゃんの「主観的世界」を支えてくれるものであった。そして、Cさんや「私」とAちゃんの

あいだで育まれた抱っこの関係性によって、Aちゃんは恐れることなく自らの「主観的世界」に入ることができ、そうした「場」に支えられ、Aちゃんは自らの「しんどい」思いをCさんや「私」と共有できたと考えられる。つまり、Aちゃんの思いが他者と共有されるためには、Aちゃんの主観的世界が共有される抱っこの関係性が必要であり、そして、Aちゃんの主観的世界を支えるものを通して可能になるのである。外的な現実世界の中で空想世界を広げることができる空間、つまりAちゃんが絵本を読んでいる空間は、まさに中間領域に位置しており、こうした関与のあり方は、Aちゃんの「しんどい」思いが表出され丸ごと受け止めることに繋がり、必要であり重要な関わりだと言える。

6.4 ヤングケアラーに必要な支援のあり方

Aちゃんが自らの思いを表出するには、抱っこの関わりと中間領域の体験過程が必要であることを述べた。一方で、中間領域のあり方は関与のあり方だけでなく、ヤングケアラー支援のあり方にも敷衍させて考えることができる。

ヤングケアラーは、自らが十分にケアされる前に、家族を献身的にケアしなければならない環境に迫られる。子どもは自らの思いを十分に言語化できないため、なんとか日々迫られるケアをこなしていくものの、その過程で自らの主観的世界が侵害されていることが多くある。抱っこされにくい環境の中で育つヤングケアラーは自らのころがわからなくなりやすい。しかし一方で、家族へのケアと向き合っていかなければならない現実もある。そうした環境に置かれやすいヤングケアラーには中間領域が必要なのである。つまりヤングケアラー支援は、ケア負担を減らすといった、ケアしなければならない「現実世界」を支えるための役割だけでなく、子ども自身の「主観的世界」を支え育てる役割も必要であることから、その両世界を支える役割として「中間領域」が不可欠であると言えよう。

7. お わ り に

ケアを引き受けることが日常化されているヤングケアラーは、自らが本当に感じている「こころがわからない」苦しみを抱える傾向にある。そうした子どもへの関与のあり方として、ウィニコットが提唱した「抱っこ — holding —」の関わりと「中間領域 — intermediate area —」の体験過程が必要であることが示唆された。そして、高橋が子どもを主体とした観点からヤングケアラーの歴史を考察し「子どもたちは、家族の介護や世話をする義務感と葛藤しながら、子どもらしい生活を送りたいという願いを抱いていることが確認できた（高橋, 2024, p. 48).」としていることに加え、本稿では、ヤングケアラー支援は現実世界と主観的世界の両方を支える中間領域が必要であることを導いた。

そして、冒頭で定義した「ケア」、「ヤングケアラー」について、本稿の考察を踏まえるならば、ケアとは「子どもにとって受け入れ難い外的な現実世界」であり、ヤングケアラーとは「ケアという外的な現実世界によって、自らの主観的世界が侵害される傾向にある子ども・若者」であると言える。

8. 今後の課題

本稿では心理学的側面に焦点を当て、ヤングケアラーである子どもに必要な関与のあり方について述べてきた。これらが重要であるとする一方で、ヤングケアラーである子どもには実際のケア負担を軽減するための支援も必要である。今後は、そうした実際のケア負担を軽減するための支援と関連させて考察していくことが必要である。

今回 A ちゃんと向き合う中で重要な関わり方について考察を深めてきたが、本稿では支援員と A ちゃんとのあいだにある関係性の考察にとどまり、いかにして関係性が構築されてきたのか、といった「過程」について触れることができなかった。今後は本稿で捉えた関係性のあり方を踏まえ、その「過程」にも言及していきたい。そうするこ

とで、関わる人全てが支えになれる道筋が見つけられ、「社会的支援」といったあり方でなくとも、ヤングケアラーである子ども達を支えられる関わりが実現されることを目指したい。

注

- 1) 北山は「抱っこ」と表現することによって (1) や (3) の意味が集約されにくいことから、「抱えること」と訳している (北山, 1989, p. 359).
- 2) 訳書では、intermediate area of illusion や intermediate area of experience など複数用いられているが、ここでは intermediate area とする。

文献

- 淡路智典 (2024), ヤングケアラーの社会的排除 —— ヤングケアラーの権利とは何か? ——, 東北文化学園大学経営法学部 経営法学論集巻 3 号
- 飯島章太 (2023), 図解ポケット ヤングケアラーがよくわかる本, 株式会社秀和システム
- 伊藤美奈子, 濱渦優希奈, 深田祐加, 宮之原慶香, 尾形有香 (2023), X 市における小・中学生を対象にしたヤングケアラー実態調査, 奈良女子大学心理臨床研究 第 10 号
- いぬいさえこ (2023), きみのそばにいるよ, PIE International, p. 9
- 河西優 (2020), (安田賞) 受賞論文 精神障害の親をもつ「ヤングケアラー」の語りにもみる社会的排除: 「ケアする存在」と「ケアされる存在」のはざまで, 関西学院大学社会学部紀要
- 鯨岡峻 (2005), エピソード記述入門実践と質的研究のために, 東京大学出版社, p. 22, 63
- 柴崎智恵子 (2005), 家族ケアを担う児童の生活に関する基礎的研究 —— イギリスの “Young Carers” 調査報告書を中心に ——, 人間福祉研究第 8 号
- 澁谷智子 (2017), ヤングケアラーを支える法律 —— イギリスにおける展開と日本での応用可能性, 成蹊大学文学部紀要第 52 号
- 澁谷智子 (2021. 7), 特集ヤングケアラー —— 精神疾患をもつ親とその子ども, すべてを包み込む支援, 精神科看護
- 高岡里衣 (2023), 家族を大切にしながら, 自分も大切にできる社会へ, 子どものしあわせ: 母と教師を結ぶ雑誌//日本子どもを守る会編, p. 20
- 高橋雅人 (2024), ヤングケアラーの歴史的考察, 湘北紀要第 45 号, p. 48
- 田野中恭子 (2019), 精神疾患の親を持つ子どもの困難 日本公衆衛生看護学会誌, 8 (1), p. 26, 28
- 中村佑子 (2023), わたしが誰かわからない —— ヤングケアラーを探る旅, 医学書院, p. 35
- 名城健二 (2023), 沖縄県 A 市におけるヤングケアラーの実態調査, 『地域研究』第 30 号 沖縄大学地域研究所
- 三富紀敬 (2000), イギリスの在宅介護者, ミネル

ヴァ書房

- 宮川雅充, 濱島淑恵 (2021), ヤングケアラーの生活満足感および主観的健康感: 大阪府立高校の生徒を対象とした質問紙調査, 第 68 巻 日本公衛誌 第 3 号
- 村上靖彦 (2022), 「ヤングケアラー」とは誰か —— 家族を “気づかう” —— 子どもたちの孤立, 朝日新聞出版
- 山本知香 (2023), 自閉スペクトラム症の自己生成に立ち会う他者に関する考察, 人間・環境学, 第 32 巻
- Jo Aldridge and Saul Becker (1993), *Children Who Care: Inside the World of Young Carers*.
- ウィニコット, D. W. (1951), *Chapter 18 Transitional Objects and Transitional Phenomena*. (北山修監訳『ウィニコット臨床論文集Ⅱ 児童分析から精神分析へ —— 第 6 章移行対象と移行現象』1990, 岩崎学術出版社, p. 105-126)
- ウィニコット, D. W. (1952), *Chapter 17 Psychoses and Child Care*. (北山修監訳『ウィニコット臨床論文集Ⅱ 児童分析から精神分析へ —— 第 5 章精神病と子どもの世話』1990, 岩崎学術出版社, p. 92-104)
- ウィニコット, D. W. (1955), *Holding and interpretation: Fragment of an Analysis*. (北山修監訳『抱えることと解釈 —— 精神分析治療の記録』1989, 岩崎学術出版社, p. 359)
- ウィニコット, D. W. (1966), *Babies and their mothers*. (成田善弘, 根本真弓訳『ウィニコット著作集第 1 巻赤ん坊と母親 —— 第 1 章普通の献身的なお母さん』1993, 岩崎学術出版社, p. 19)
- サリヴァン, H. S. (1953), *THE INTERPERSONAL THEORY OF PSYCHIATRY*. (中井久夫, 宮崎隆吉, 高木敬三, 鑑幹八郎共訳『精神医学は対人関係論である』2022, みすず書房)
- サリヴァン, H. S. (1954), *THE PSYCHIATRIC INTERVIEW*. (中井久夫, 松川周悟, 秋山剛, 宮崎隆吉, 野口昌也, 山口直彦共訳『精神医学的面接』1986, みすず書房, p. 19)
- メイヤロフ, M. (1971), *ON CARING*. (田村真, 向野宣之訳『ケアの本質質 —— 生きることの意味 ——』2001, 株式会社ゆみる出版)
- 一般社団法人ヤングケアラー協会
<https://youngcarerjapan.com/>
- こどもまんなかこども家庭庁 (2024) ヤングケアラー支援の強化に係る法改正の経緯・施行について
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/e0eb9d18-d7da-43cc-a4e3-51d34ec335c1/628c375f/20240612_policies_young-carer_11.pdf
- ふうせんの会
<https://ycballoon.org/index.html>
- ヤングケアラーの実態に関する調査研究について 令和 2 年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社
<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000767891.pdf>
- NPO 法人こどもソーシャルワークセンター
<https://cswc2016.jp/>

Approaches to Involvement in Supporting Young Carers: From Interactions with Child A

Kuni KOH

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Young carers often lose touch with their own true feelings while dedicatedly caring for family members. This paper attempts to clarify what kind of involvement is necessary for young carers, using an episodic description method based on interactions with Child A, whom we met during support activities. As a result, it became clear that involvement as “holding” and “intermediate area,” as proposed by D. W. Winnicott (1896–1971), is necessary. Furthermore, it was concluded that support for young carers requires the role to support two worlds: sustaining the child’s subjective world and taking on the care that appears as the external real world. Therefore, support as an “intermediate area” is essential.

Keywords: young carers, episodic description, holding, intermediate area, qualitative research